

障害児保育担当者研修会の在り方に関する研究

— 研修担当講師の自己評価を中心に —

清水 浩¹

I 問題の所在と目的

近年、保育所や幼稚園等の保育施設において、特別な配慮を要する幼児の支援が課題となっている。特別支援教育が2007年度より完全実施となり今年度で11年目を迎えるが、障害の診断はないが気になる幼児が1名以上在籍している保育所は9割を超えとの報告（原口ら、2013）等もあり、保育所や幼稚園等における発達障害児の理解と支援等を目的とした研修会を開催する自治体が増加するなど、障害児保育に対する専門性の向上や、地域におけるさらなる支援システムの充実等が求められている。

文部科学省は、「医療、保健、福祉、教育、労働等の各機関が、乳幼児期から学校卒業後まで、障害のある子どもに一貫した支援を行うことができるようにするための計画（「個別の支援計画」）を策定する。」としており、また、障害者基本計画の教育・育成分野においては、「障害のある子どもの発達段階に応じて、関係機関が適切な役割分担の下に、一人一人のニーズに対応して適切な支援を行う計画（個別の支援計画）を策定して効果的な支援を行う」こととともに、重点施策実施5か年計画においては、「盲・聾・養護学校において個別の支援計画を2005年度までに策定する」ことが

¹山形県立米沢女子短期大学社会情報学科
e-mail : shimizu@yone.ac.jp

示されている。

個別の支援計画とは、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って、医療、保健、福祉、教育、労働等の関係機関が連携して、障害のある子ども一人一人のニーズに対応した支援を効果的に実施するための計画であり、その内容としては、障害のある子どものニーズ、支援の目標、支援を行う者や機関の役割分担、支援の内容や効果の評価方法などが考えられる。さらに、この中では、ライフステージを通じた一貫した相談支援となるよう福祉、保健、医療、労働等の関係機関と連携して個別の支援計画を策定することが期待されている。このように、発達障害幼児の理解と支援に当たっては、個別の支援計画の理解と作成に力を入れながら、障害児保育担当者の専門性向上を図る取組が求められている。

以上のように、発達障害幼児の支援において、早期発見や早期対応が重要であることから、山形県においては、発達障害幼児の理解と支援に関する研修会を企画する保健所等が増加している。その中の一つである山形県A保健所では、身近な支援者である保育士等を対象として、発達障害児の特性に応じた個性のある支援の習得に向け、個別支援計画の作成をテーマとした研修会を2011年度から企画している。筆者は、山形県A保健所主催研修会の講師を2015年度より担当しているが、研修内容に関しては、参加者の年齢、参加目的、経験年数等、様々な方々の参加が考えられるので、参加者の研修会に対する評価から、研修会の在り方等についてニーズや理解度等を把握し、自己評価を加えながら研修会を企画していくことが求められると考える。

今回の研究では、山形県A保健所が実施した研修会後の参加者アンケート結果を参考にして、研修担当講師としての自己評価を行い、今後の研修会の在り方について検討することを目的とする。

Ⅱ 方法

山形県 A 保健所が主催した発達障害支援関係の研修会終了後に実施した、アンケート結果の分析及び研修担当講師としての自己評価及び考察。

Ⅲ 結果

研修会の概要は以下のとおりである。

【時期】 201X年1X月X日、X+7日（2日間）

【時間】 13：30～16：30

【内容】 研修会名「個別支援計画の理解・作成」

内容の内訳は、発達障害幼児の特性理解、具体的な支援方法、個別支援計画の作成、事例紹介、合理的配慮である。なお、研修会時に配布した資料は、パワーポイント資料（スライド113枚）である。

1 研修会参加者アンケート結果

(1) 所属

出席者46名。アンケートの回収数は45名で、回収率は97.8%であった。参加者所属内訳を表1に示す。

表1 参加者所属内訳

所属	人数	(%)
認可保育所	26	(58%)
認定こども園	10	(22%)
幼稚園	8	(18%)
届出保育施設	1	(2%)

認可保育所が58%、認定こども園が22%となっており、併せて80%を占めていた。

(2) 経験年数

参加者の保育に関する経験年数を表2に示す。

表2 保育経験年数

期間	人数	(%)
1年未満	5	(11%)
1～3年未満	8	(18%)
3～5年未満	4	(9%)
5～10年未満	12	(26%)
10～20年未満	9	(20%)
20年以上	7	(16%)

経験年数については5～10年未満が26%と最も多かったが、様々な経験年数の方が参加していた。また、1年未満の方及び3～5年未満も1割程度参加していた。

(3) 講話と演習の時間配分

研修時における講話と演習の時間配分についての感想を表3に示す。時間配分についてはちょうど良いが80%と最も多かった。

表3 時間配分

内容	人数	(%)
講話を長くして欲しい	4	(9%)
ちょうど良い	37	(80%)
演習を長くして欲しい	5	(11%)

(4) 研修内容の理解

研修内容の理解を表4に示す。

表4 研修内容の理解

内容	十分理解	理解した	やや難しい	難しい	未記入
障害特性の理解	9 (20%)	33 (73%)	3 (7%)	0 (0%)	0 (0%)
支援方法	8 (18%)	34 (75%)	3 (7%)	0 (0%)	0 (0%)
合理的配慮	3 (7%)	30 (67%)	10 (22%)	0 (0%)	2 (4%)
他機関との連携	3 (7%)	30 (67%)	9 (20%)	0 (0%)	3 (6%)
保護者との連携	3 (7%)	32 (71%)	7 (16%)	0 (0%)	3 (6%)

① 障害特性の理解

障害特性の理解については、参加者の理解度をみると、「十分理解した」が20%、「理解した」が73%、「やや難しい」が7%となっている。なお、「十分理解した」と「理解した」を合わせると90%を超える結果となっている。

研修内容は、発達障害児の障害特性の基本的理解を目標にして、学習障害 (Learning Disabilities:以下「LD」)、注意欠陥多動性障害 (Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder:以下「ADHD」)、高機能自閉症 (High-Functioning Autism:以下「HFA」)に関する理解を深める内容を取り上げた。

特に、発達障害を持ちながら、世界的に活躍する方々を紹介し、子どもの頃のエピソードや適切な支援の在り方について具体的な例を挙げながら説明をすることにより、理解を深められる工夫を行った。

また、発達障害の疑似体験を取り入れることで、実際の体験から発達障害幼児が感じている学びへの困難さについて、理解を深めることができた。さらに、自分自身の体験について、他の参加者と感想を共有し、一緒に適切な支援について検討することにより、学びや理解を深めることができたようである。

LD児の理解については、読字の困難性、書字の困難性を中心に、実際の

見え方や、読み方等を紹介した。

ADHD児の理解については、アメリカにおける支援の実際や、薬物療法等についての紹介や説明も併せて行った。その他、ADHD児はなかなか感情が育たないということが言われていることから、感情教育の実際について紹介し、感情教育の大切さについて説明した。この際、感情教育に使用される教材についても紹介を行った。

HFA児の理解については、参加者自身が自閉症をどの程度理解できているかを確認する意味で、自閉症理解度チェックリストへの回答を取り入れた。

また、米国精神医学会におけるDSM-5にて診断基準が変更された内容等を説明した。この際、感覚の問題にも触れ、日本版青年・成人感覚プロファイル自己肯定質問票を紹介し、参加者自身の感覚の状態について、チェックをしてもらい、理解を深める取組にするよう心掛けた。

さらに、発達障害幼児の早期療育、保育を担当されている方々がほとんどであるので、発達障害児を早い段階で気づくためのポイントとして、コミュニケーション・社会性、感覚、認知等の各領域についてのポイントを示した。

② 支援方法

支援方法については、「十分理解した」が18%、「理解した」が75%、「やや難しい」が7%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると、90%を超える結果となっている。支援方法については、園における幼児の行動に関する理解を深めることを大切にしたいと考え、事例検討を取り入れた。

③ 合理的配慮

合理的配慮については、「十分理解した」が7%、「理解した」が67%、「やや難しい」が22%、「未記入」が4%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると70%を超えているが、「やや難しい」も20%を超えている結果であった。

障害者差別解消法を含め、障害者差別に関する施策の変遷や、障害者を取り巻く環境では、どのような配慮が必要なのか、これまでとこれからにおける変更点等について具体的に確認を行った。

④ 他機関との連携

他機関との連携については、「十分理解した」が7%、「理解した」が67%、「やや難しい」が20%、「未記入」が6%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると70%を超えているが、「やや難しい」も20%と高くなっている。このことから、他機関との連携に関しては、課題があるということが理解できる。

この課題に関しては、研修の事前に質問事項を参加予定の方々よりいただくことで、課題となっている事項に丁寧に対応することができた。このことにより、連携方法や各機関の役割等について、ポイントを絞りながら説明をすることができた。

⑤ 保護者との連携

保護者との連携については、「十分理解した」が7%、「理解した」が71%、「やや難しい」が16%、「未記入」が6%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると80%弱となっている。また、「やや難しい」が16%と高くなっている。このことから、保護者との連携に関しても、他機関との連携と同様に、課題が多くみられる。

⑥ アンケート集計結果に対する自己評価

講話の内容については「児の特性の理解」、「児の支援方法」については9割以上が「十分理解」または「理解できた」と回答している。

「合理的配慮」、「他機関との連携」、「保護者との連携」については7割以上が「十分理解できた」または「理解できた」と回答している。

他機関及び保護者との連携については、実際に児童発達支援を利用しての事例の紹介（保育施設及び利用施設職員などから）、医療機関受診までの状況（市町母子保健担当から）、就学準備等に関する内容（教育関係から）や、発達障害児の親の会等の保護者の体験談等の内容を取り入れるこ

とで、より理解しやすくなるのではないかと考える。

(5) 個別支援計画の書き方

個別支援計画の作成について、表5に示す。

表5 個別支援計画の作成

内容	十分理解	理解した	やや難しい	難しい	未記入
プロフィール	8 (18%)	26 (58%)	10 (22%)	0 (0%)	1 (2%)
長期目標	11 (24%)	16 (36%)	17 (38%)	0 (0%)	1 (2%)
短期目標	8 (18%)	15 (33%)	20 (45%)	1 (2%)	1 (2%)
支援方法	9 (20%)	23 (51%)	10 (23%)	1 (2%)	2 (4%)
評価	8 (18%)	26 (58%)	9 (20%)	0 (0%)	2 (4%)

① プロフィール

プロフィールの書き方については、「十分理解した」が18%、「理解した」が58%、「やや難しい」が22%、「未記入」が2%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると80%となっているが、「やや難しい」も22%と高くなっている。

② 長期目標

長期目標については、「十分理解した」が24%、「理解した」が36%、「やや難しい」が38%、「未記入」が2%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると60%となっている。また、「やや難しい」が38%と約4割の参加者が難しいと回答している。

③ 短期目標

短期目標については、「十分理解した」が18%、「理解した」が33%、「やや難しい」が45%、「難しい」が2%、「未記入」が2%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると51%、また、「やや難しい」と「難しい」を合わせると47%となっており、約半数の参加者が短期目標の設

定について難しさを感じているという結果となった。

④ 支援方法

支援方法については、「十分理解した」が20%、「理解した」が51%、「やや難しい」が23%、「難しい」が2%、「未記入」が4%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると71%となっており、長期目標や短期目標設定の結果よりも高い数値となっている。また、「やや難しい」と「難しい」を合わせると25%となっている。

⑤ 評価

評価については、「十分理解した」が18%、「理解した」が58%、「やや難しい」が20%、「未記入」が4%となっている。「十分理解した」と「理解した」を合わせると76%となっている。また、「やや難しい」が20%で、「難しい」は0%であった。

⑥ アンケート集計結果に対する自己評価

個別支援計画の書き方については5～6割程度が「十分理解した」、「理解できた」と回答している。昨年度より「やや難しい」、「難しい」と回答している人が多い。

(6) 研修の活用

今回の研修の園等における今後の活用方法に関する意識を表6に示す。

表6 研修の活用

内容	人数	(%)
とても活用できる	15	(33%)
活用できる	26	(58%)
少し活用できる	1	(2%)
未記入	3	(7%)

今後の業務への活用については「とても活用できる」、「活用できる」と回答したが全体の9割を超えた。とても実践的な内容と捉えていることが分かった。

(7) 個別支援計画の活用

① 個別支援計画の活用状況

個別支援計画の現在の活用状況について表7に示す。

表7 個別支援計画の現在の活用状況

内容	人数	(%)
十分活用できている	3	(7%)
活用できている	9	(20%)
少し活用できている	10	(22%)
あまり活用できていない	14	(31%)
未記入	9	(20%)

個別支援計画の活用について「十分活用できている」、「活用できている」と回答した方は3割未満。半数以上が「少し」または「あまり活用できていない」と回答している。

② 今後の個別支援計画の活用対象・場面等の拡大

今後の個別支援計画の活用における、対象や場面等について、拡大していくか等の考えについて表8に示す。

表8 個別支援計画の活用における今後の予定

内容	人数	(%)
拡大予定	15	(33%)
今後検討	26	(58%)
未定	1	(2%)
その他	3	(7%)

今後の個別支援計画の活用については、3割の回答者が「拡大」、6割近くが「今後検討」と回答している。現在は、6割の園では発達障害児を中心に、個別支援計画を作成しているが、4割の園では作成していないことが明らかとなっている。この研修会が、今後の活用拡大について検討する一因となったことも考えられた。

(8) 今後の研修内容の希望（複数回答）

今後の研修会内容についての希望を表9に示す。

表9 今後の研修会内容への希望

内容	人数	(%)
基礎的な内容	11	(24%)
児への対応	26	(58%)
保護者対応	30	(67%)
当事者体験談	13	(29%)
地域の社会資源	2	(4%)
実践事例報告	21	(47%)
事例検討・個別支援計画	5	(11%)

(9) 参加者の意見

① 発達障害幼児への対応

- 気になる子に対するの対応、声かけをどうすればいいか考えながら学んだことを活かして保育していきたい。
- 保育の中で不安だったことが軽くなったり、自分でも気付いていなかったことに気付いたり、とても貴重な体験となった。発達障害や気になる子への対応は、今後も子どもが変わっても出てくることだと思うので、定期的に再び開催していただくと嬉しい。
- 実際に子どもたちと関わる中で具体的な関わりのポイントを教えていただき、大変参考になった。

- 私が1年目ということで不安や分からないことがたくさんあったが、解消され、今後の保育に活かしていきたいと思う。
- 障害といっても一人一人違い、対応も異なるため、具体的な支援を考えるのが難しかった。でも、その子を理解しようという気持ちを忘れず反応をみて関わりをもっと深めたいと思った。色々な関わり方をすることで、その子に合う支援に繋がっていくと分かった。
- 早い気付きのポイントなども各項目載せていただき、気付きの目安ができて分かりやすかった。
- 発達障害児に対しての対応の仕方について勉強になった。園に帰ってさっそく色々実践したいと思う。大変分かりやすく説明していただいた。
- 早期の気付きとして子どもの捉え方や目標の立て方をたくさんの具体例を挙げながら説明してくださって、とても分かりやすかった。

② 他機関との連携

- 他機関との連携で、保護者が関心を持ちだしたときに適切な医療機関を紹介する際の、具体的な施設機関の一覧表や連絡方法が欲しい。
- 他機関との連携についても、詳しく教えていただきたい。

③ 研修内容

- 今回と同じように、個別支援計画の作成についての研修会をまた開催して欲しい。
- 短時間で全く関わったことのない子の個別支援計画を考えるというのは少し難しい。
- 分かりやすく頭に入ってくる内容だった。これから活かしていきたい。
- 様々な事例と共に関わり方を分かりやすく教えていただき、とても勉強になった。
- 細やかに教えていただき、事例もとても具体的で分かりやすくとても参考になった。
- 経験年数も1年未満ということで、いろいろな園の事例を聞くことが

できとても良い経験ができた。また、発達障害についても分かりやすく知ることができ、今後の保育に役立てていきたい。

④ 研修の進め方

- グループワークで他園の方の話を聞くこともでき、支援方法やたくさんの方の考えを聞くことができ、とても有意義だった。
- 他の保育施設の先生方のお聞きし同じ支援の仕方について悩んでおられることを感じた。それぞれの実践例を聞く機会となった。
- 発達障害の実例をグループワークで話し合うことで深く学ぶことができた。
- 実際の子どもをもとに話をする事ができ、より分かりやすく良かった。

⑤ 研修時間

- 講義の時間をもう少し増やして欲しい。
- 全体的に時間が足りなかったように思う。終了を17時までにしても良いように感じた。

⑥ 個別支援計画

- 事例検討をする場があったことで、計画の立て方などの他、他の園での支援方法を知ることができた。
- 指導計画の作成についても、言葉の選び方まで話して頂いて、今後活用しやすかった。
- 自園でも支援児童指導計画を作成して保育を行っている。今後今回の研修でお聞きしたことでより具体的に記入できると思う。
- 具体的に自分で個別支援計画を作成出来て良かった。
- 資料も講話もとても分かりやすかった。個別支援を必要とする子がいる中で作成の仕方が分かり、今後役立てていきたい。
- 個別支援計画についての理解はもちろん、グループワークで他の園の先生方とお話ができ、とても参考になった。今回の講座を思い出しながら、園の方でも支援方法について考えていきたい。

IV 考察

1 研修会の実際

研修会には、実50名、延96名、38保育施設から参加があった。研修内容は、発達障害の基礎知識の講話、個別支援計画の具体的な作成の演習の他、グループワークを取り入れ、支援や連携方法等情報交換が図られるよう工夫した。

研修会後のアンケート結果で、研修内容の今後の活用については「とても活用できる」、「活用できる」との回答は91.1%だった。「記述方法が具体的に活用しやすい」などの感想もあり、実用度の高い研修会を実施できたと思われる。今後の個別支援計画の活用については、33.3%が「拡大」、57.8%が「今後検討」と回答しており、参加者の多くが計画の活用を前向きに捉えていることが分かり、今後、さらに、発達障害幼児に合った支援が期待される。

一方「連携の必要性」については「十分理解」、「理解できた」との回答が73.3%に留まっているので、次年度は、保健・医療・福祉・教育との連携について研修内容に含めることを検討する必要がある。

2 参加者の自由意見

時間については、自由記載には「足りない」という意見もあったが、時間配分については「ちょうどよい」がほとんどを占めていた。

医療機関の一覧表などが欲しいと意見があったが、未就学児の発達障害等の診断を行っている医療機関は限られている。また、県立B医療療育センターは、市町村を通し予約が必要なところもあるので、母子保健と保育施設との連携についての内容を検討する必要がある。

事例検討、グループワークを実施したが参加した保育者自身の日々の支援の悩みや、自身が担当する事例だけでなく、他園の事例や支援状況等の情報を共有することができ良かったとの意見もあった。参加した保育者自身の施設外の職員と情報交換できる機会は貴重であると思われるので、引

き続き研修内容に含めていきたいと考える。

3 自己評価

(1) 講話

研修会の進め方は、障害特性理解や具体的支援方法などを説明、解説しながら行う講話と、参加者同士が適切な支援方法などを考え、一緒に話し合いながら検討する演習の二つの方法で実施した。

講話は、分かりやすい説明と、簡潔な資料作りを心掛けた。特に、障害特性理解については、発達障害を持ちながらも、自分の特性を理解し、自分の強みを生かしながら世界的に活躍されている人々を紹介した。また、その人々のエピソードを盛り込むことで、発達障害の特性についてイメージを持たせることができたのではないかと考える。

(2) 演習

演習は、発達障害の疑似体験、合理的配慮、事例検討を取り上げた。疑似体験では、①I. 注意・集中（1）注目・集中、②IV. 読む（3）ひらがな文、③VI. 算数（3）筆算、④VIII. 不器用さ（4）マス目に文字を書く、を実施したが、この際、活用したものは、「新版LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム（日本LD学会）」である。これを実施することにより、参加者は発達障害への理解を深めることができたと考える。特に、体験を通し、その体験をもとに感想や適切な支援の在り方等を参加者同士が話し合いをすることで、理解を深めることができたと考える。また、合理的配慮や事例検討についても、演習を取り入れて実施した。

個別支援計画の理解と作成については、演習を中心に実施したが、プロフィール、長期目標、短期目標、支援方法、評価について、「やや難しかった」、「難しかった」と回答した参加者が多くみられた。これはモデルとなる事例を取り上げたことが、理解を深めることにつながらなかつたと思われる。今後は、参加者各自が支援している事例を取り上げることで、対象とする幼児をイメージしやすく、具体的な支援を考え、理解を深めること

ができると考える。

個別支援計画の理解と作成では、取り上げる事例を、参加者が実際に支援する事例を取り上げることが重要である。その事例について、プロフィール、長期目標、短期目標、支援方法、評価を検討できる内容としたいと考える。

目標設定に当たっては、参加者の自由記述の中に、目標として使用する言葉というものの紹介があることで理解が深まったという内容があるので、長期目標、短期目標も併せ、目標設定する際に参考となる言葉遣いというものをおおらかはじめ示すことで理解が深まると考える。

V まとめと今後の課題

今回の研究では、障害児保育担当者を対象とした研修会について、研修会参加者の事後アンケートの結果を参考に、担当者としての自己評価を加え、今後の研修会の在り方について検討をした。

2日間の計6時間に渡る研修会であるが、参加者の発達障害児の理解や具体的な対応、保護者対応等に関するニーズ及び理解度は高く、参加者が今後さらに高い専門性を身に付けるため、内容の充実を図る必要性があることが明らかとなった。一方、個別支援計画の理解と作成については、作成の目的や意義、担当者間や保護者及び関係機関との連携のツールとしての活用が多く求められていることは理解できているが、目標設定や具体的な支援方法等については、理解度が低く、さらなる研修が必要であるということが理解できた。研修担当者としては今後さらなる検討を重ね、適切な目標立てと具体的な支援方法を設定できるように、研修内容の改善が求められる。

総務省から文部科学省、厚生労働省に出された勧告には「支援計画等作成対象とすべき児童生徒の考え方の提示」とあり、今後、全国的にも支援が必要な子どもに対し計画が作成され、適切な支援につながる児が増えることが期待される。

今後は、研修会を主催する機関との連携を充実させ、研修参加者の理解を十分に把握しながら、さらなる研修の充実を図りたいと考える。また、個別支援計画だけでなく、ライフステージを通じた切れ目なく、重層的な支援が受けられるようにするための支援体制整備の構築を目指していきたいと考える。

参考文献

- 1) 原口英之、野呂文行、神山努(2013) 保育所における特別な配慮を要する子どもに対する支援の実態と課題：障害の診断の有無による支援の比較, 障害科学研究 37, 103-114, 2013.
- 2) 重点施策実施5か年計画(2007)
- 3) 新版LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム, 日本LD学会.
- 4) 総務省(2017) 発達障害者支援に関する行政評価・監視, 結果報告書・勧告.